



# 岐蘇林

## 目次

- 隨筆
- 鴨綠江畔より
- 白脚園
- 贈力の修養
- 脱菴狐の話附狐憑の事
- 日記の中より
- 和歌
- 木曾を偲びて
- 春季雜詠
- 俳句
- 雜報
- 學校便り
- 校友會便り
- 辯論會の記
- 觀櫻會の記
- 會員異動
- 會員の計
- 大正五年度校友會經常費決算報告

大正六年五月廿五日發行 第九拾壹號 每五廿月五年六正大

### 隨筆

◎鴨綠江畔より 坂本光太郎

前號に引つゞき本號には朝鮮人の衣食住に就て御紹介せむ

#### (三) 衣食住

イ、衣。鮮人古來の風習として其の衣服は概ね白衣を用ひ終年之を纏ふ其の質多くは木綿「キヤラコ」麻布等を用ひ居れるも現時生金巾及生「シーチング」の需用漸く増加せるの形勢を示し來れり而して一般に單色の衣服を用ひ未婚者にありては男女共に黄色桃色又は紅の上衣を用ゆるもの多く已婚の女子は藍色の裳を穿つ者あり男子は兩班にあらざれば有色の絹衣を着することを得ざりしも現時之を遵奉するもの漸く其の數を減するに至れり今之等衣服に就て概要の説明を加へむ先づ上衣は「襦」稱し筒袖にして男子のものは長さ臂に達し女子のものは頗る短かくして乳房を露出し一見奇異の觀あり斯くして男女共に襟に紐を附し之を男結となして右前に長く垂る下衣は袴と稱し本邦の股引に酷似し筒頗る太し下部は足根の上部に於て細紐を以て緊結す女子は老幼の別なく袴の上に裳を纏ひ後方にて合はす其の形も西洋婦人の穿てる袴に類し縦襷積多くして且長き事殆んど地を曳くものあり外衣は之を周衣と稱し筒袖として長さ膝下に達す裾寛裕なるを以て歩行に便なり

所謂本邦の羽織に比すべく多く他出の場合に用ひ單衣あり裕あり綿入ありて四季に應ずる事内地の衣服と異ならざるあり履は形狀舟に髻髭たる白黒の靴にして牛馬皮を以て調製し底面無數の釘を打つ然れども一般に穿つものは麻鞋にして麻草を以て製し農夫は藁を以て作ることあり其の形狀は靴に類し甚だ淺し泥濘の場合には舟狀の木履を使ふもあれど目方三百々に及び吾人之履を穿つも歩行自由ならざるなり之等の履は都市に於て用ふれども少し田舎に至れば雨天と雖穿つことなく徒跣の儘にて室内に入す

冠は室の内外を論せず之を戴くものにして其の製、竹を以て骨子を成し支那紗を貼付し黒漆を以て之を染む上等品は絹糸又は馬尾を使用し其價廉からず喪中は一様に麻布白紗、白絹の頭巾を戴くを常とせり而して婦人は長さ二三尺の白木綿を四五寸の中にたたみ頭に巻き付く兩班の娘が外出するときは直經二三尺の六角或は梅の花形の笠を被るものあり以上は朝鮮古來よりの風俗なるが日韓併合の今日鮮人何れも文明化し都市にあるものは殆んど散髪を爲し洋服を纏ふあれば日本服を着する者杯多し殊に日語に熟達せる鮮人等の洋服を着する時は一見内地人に異ならざるなり

(備考)咸鏡南北道に於て衣服原料需要の趨勢を見るに咸興附近は日本木綿、北青以北城津附近まで天笠布、城津以北清津附近一

大正六年五月廿五日發行 長野縣西筑摩郡 岡町二八九番地 發行所 廣澤書店



衛生「シーチング」と云ふ面白き一現象を示し居れり

口、食。今や文明國に倣ひ都市に住する中流以上の家庭は概ね和洋食を用ゐるの風あるも山間僻地にある鮮人及中流以下の者は概して二食にして米食を主とするもの極めて少く其大半以上は麥、粟、大豆、稗、燕麥等を混食し毎回温食するの風あり其の量甚だ多く眞鍮の大椀に盛り上げ匙を以て之を食し一椀能く内地人の三食に相當し多く其の品質を撰ばず大食して飽かざるなり鮮人の用ふる食器は主に眞鍮製なり而して最下位の労働者に至りては大道に於て之を食ふを常とせり之に要する副食物は肉類、干魚、野菜にして肉類は牛肉、鶏肉、豚肉、羊肉、犬肉、魚肉等あり右の外食物として馬鈴薯、南瓜、蜀黍等あり犬肉は夏季炎暑の候に於て多く愛用せり地方一般多く犬を飼育するは此を食料に供せんが爲めなり魚肉は海邊又は河流沿岸の地にありては生魚を食する事を得れ共沿岸を距る奥地は交通不便なるを以て干魚(明太魚、鱈魚)或は鹽魚にあらざれば食膳に上するを得ず殊に北鮮人は塩蔵せる明太魚卵を嗜好物となす野菜は地方にありては種類多からず白菜、大根、豆、芽菜等に止まり好んで韭、蕃椒を多用す上下を通じて頗る珍重するものは沈菜(漬物)にして此が加味に種々の工夫を凝し魚を混じて漬けるもの最も美味にして汎く行はるる副産物たり。酒類は自家醸造の

燒酎、藥酒、濁酒等ありて之を並用す。雖も燒酎最も多く用ひられ居れり而して其味内地産に類似せるも臭氣あり度力十四、五度内外のもの多し藥酒は内地清酒の中酌に似たるも不味なり濁酒は稍々酸味を含み酔力弱く中流以下の人民は一般に之を多用す近時内地人の居住するもの増加に伴隨して日本酒を愛用するもの漸く多く將來其販路の好望を示し居れり尙昨今麥酒をも愛用するに至れり  
其他飲食物として豆腐の如きは至る處之を得べきも油臭甚だしく吾々の口には極めて不味を感ず菓子も朝鮮船にして甘味少く吾人が之を食する時は往々下痢することあり又夏季の中食代用として蕎麥、素麵の類を食するも貧民の労働者の多くは眞瓜を喫するもの多し又彼等鮮人が煙草を愛喫するは實に驚くべきものありて男子は室の内外を問はず常に長き(二尺乃至三尺にして雁首の經一寸位)煙管を携へ己を得ざるにあざれば之を放さざる有様なり之とて昨今は漸時に減退して卷賣を需要するに至れり東亞煙草會社製品「ウエルス」胡蝶「カラス」及英米實會社製品「ゴールデンポピー」は時勢の然らしむる所なり  
ハ、住。咸南北兩道一帶に於ける家屋の構造としては多く藁葺等の平屋作りにして瓦葺家屋は僅に咸興、鏡城、會寧、北青等の都市及地方官有の地主に於て之を見るを得

べきのみ都市と雖も其七分は藁葺、草葺なり最も之等の家屋は一般に矮小にして其の高さ五六尺に過ぎず床は地上より一尺許りの高さに於て扁平なる石を並べ其間隙は泥を以て目塗りし床下數條の溝を作り火氣溝を通じて室を温むる構造を成す之を稱して温突と云ふ而して普通民家にありては焚口に竈を築き炊爨の火氣を利用し以て防寒の用に供し居れり中流以上の家屋にありては床上に厚き油紙を貼付するも下流社會の住居は僅かにアンペラを敷き其の上に座臥するに過ぎざるあり而し家屋の周圍は多く門橋を繞らし中流以上に在りては冠木門を作り圍らずに土塀若しくは網代を以てせり網代は柳枝或は萩の類を編みたるものにして固定する杭は高く亂立して異觀を呈す  
柱は頑丈なるものを用ひ壁は牛糞を混じたる泥土を以て塗り凹凸不整を極む家屋の大きさは通常四五坪にして室は二三房に區別す一室僅に二三疊に過ぎず室毎に一二の小窓を設けあるも室内陰鬱にして日光透らす空気の流通極めて悪しく終年咽氣惡臭を放ち不快云ふべからざる要するに鮮人普通家屋は豚小屋に等しく不潔あること言語に絶し僅かに穴居より一步を進めたるに過ぎざるも尙之を南鮮のものに比するに數等優秀のものにして地方富豪及往時の官廳を怡も我奈良朝の建築物と類似し往々二階建等ありて廢寺の如き感を爲すあり  
最も現時都市に於て我官憲に仕ふる官吏の

如き亦貿易商人の如きは「バラック」式日本家屋に住するを見るあり(未完)

◎白躑躅

翠

峯

山光水色春將に盡きんとす。とある野の石に踞して見渡す野邊に霞長閑に立ちこめ更に遙なる彼方を眺むれば一片の紫雲有るかなきかに漂ふは之晩春の遺瀾無き人の心を掩ふ自然の姿からずや。あゝ白躑躅はまた咲けり。思へばきのふ今日とも覺ゆるに早くも祖母が身罷りてより花咲き花散りて茲に六年の年月を経たり。  
墓前に跪きて静かに目を瞑つれど幽明遠く隔りては懐しき聲を聞くよすがもあらず。涙の六年前が追憶は泉の如く湧き出でて愁思更に新なるものあり。  
暮しの祖母よ君は今いづこにありや。今にして念すれば往事茫として夢の如し。君はいかに我を愛せしよ、されども我は祖母を嫌ひたりき祖母が強烈なる愛は年々に其身を傷けゆきしも幼き心にかで覺り得むやがんせなき事言ひては困らせ、祖母が少き小言にも悪口言ひては飛び出しぬ。併し夜ともなれば誰か愛せざる祖母を慕はんや。夜を夜な祖母が暖き寝物語りに美しき思ひ出の夢をこそむすびしか。  
小學校へ行く路の右手に今は余程にもなりつらん櫻樹の並樹在り。あはたゞしき晩春の午後葉櫻の蔭に佇める祖母を見たり。祖

母は斯くして折々我を村童の荷めむせんやとて見張れるなりき。或年の初雪五寸も積りし日、祖母は我幼き足に雪の蹴散らし難しとや思ひ給へる、學校の歸途を擁して路傍の小丘に立ち上りつゝ我姿の校門を出るより早く大聲に呼び給へり。其折々の辱しかりしこと今も猶忘れ遺らず。冬の一夜炬燵の火の温きに過ぎしや、更けて寂しき床に覺むれば心寥しさと心地悪しとにしくしくと潑り泣くうち鼻血の痛みもせて流れ出でたり。眼ざめたる祖母は更に驚きぬ。介抱は愛ある人に若くはなし、聽て我は再び心地よの睡りに入りぬ。朝になりてふとめざむれば満頭を掌に積みて昨夜の寝間着の儘祖母は我枕頭に侍し給へり。あれより一夜まんじりともせで明したらむ。七年前の正月なりしか、新しき漆の膳にて年越したるに元日の夕よりは顔は赤く膨れ上り二日の朝に到れば眼まで埋れて心地悪しく遊意頻りに催して堪へ難かりき今宵は油屋に歌留多取りあすは隣家に團樂せんと約し置きて唯一人残さるゝことの如何に悲しかりしぞ然れども我より悲しかりし人は三ヶ日の間こんな膳は壞して了へど怒りたる人ありき思ひ出る毎に涙無からんや。  
大川の空低く立ち迷ふ霧をながめて明日の天氣の危を知り、小暗き時雨の椽に耳歌て、鬼淵の瀨音に雨上りを想ふ祖母ありき。十六年の梅干今も猶紅ある祖母ありき。朝靨の双葉出るを見て一とせ四寸の縁取り紫

を喚かしためたる祖母が丹精を偲ぶ。祖母は努力家なりき。曉灯要らざらん時に起き出でて針を運びぬ。夜は暗き洋燈の光りの如何に祖母が瞳を損ひけん。祖母は斯く働きて死する前に約せる脱物全部を仕出來し終り。坐ろに涙滲まざらんや。  
祖母は不幸なりき、祖母が家は其十歳の時幕末の餘燼に葬られたり。父は其春世道人心の紙よりも薄きを憤りて死し、母は其秋孤り荒野を行くが如き寂寥に堪へ得て迷誤が中に獨りの祖母を遺して死せり。斯くて祖母は齡弱きより流轉極りなき皮相の世を眺め我家の人とありては洗ふが如き窮乏の辛慘に倦めり。死するまで働きて名聞の報無く努めて利達の償なかりき。  
身罷る年の初春祖母は改りて我を膝に招きぬ。喃家柄をまた言ふ程にありきがらねどわしが第一の願望はた前が偉い人になることなるぞと泌々と語られたり。春風秋雨の六年が間この數言を忘れざりしや。あゝ置所もなき我命かな。  
窓のしたゆくさゝ川の  
さらさらげにと思はねど  
をりふししづむ弓はりの  
月にも堪へぬたもひかな。  
身を立て家をたこせよと  
そひねの床に聞きおれて  
胸に泌みけむ庭訓の  
またぞろに偲はるゝ。



そのみ教へはわすれねど  
そら行く雲のいたづらに  
としをかさぬる人の子を

辛亥の暮松飾り餅搗き大掃除など三日は  
疊に難を追ひ上る急がしき。祖母は元氣よ  
く神棚あたりの塵拭へるが過りて秘藏の神  
酒壺を落せり壺は眞二つにちこぼれも無  
く割れたり。颯と祖母の顔色は變りぬ。そ  
の時よりその元氣もからりと變りて死なば  
此年からなご力無げに言へり。  
明る壬子の一月末頃より祖母が元氣は益々  
墜ち行きたり。二月に入りて其胸のあたり  
に大なる腫物あるを示しぬ。然れども己  
にたそかりき。祖母は人に知らさじとて幾  
月がうち唯一人の胸を痛めたりき。  
新春回り來れば大氣清し樹は瘦せ花は少  
れども鳥は囀り椿は既に咲きて音もなく崩  
れやすらむ。自然は斯くも永劫に平和の姿  
相を現するに人許りは何故に限無き哀愁に  
とさざるや。傷ましきかな。花に三春の  
香無く人に十年の麗を。無常迅速の世の  
さま人のすがたあはれいづこにか恒常の貌  
あらん。  
早くより浮世の無情を覺りし祖母には泡沫  
夢幼の世に一日の壽を何かはせん、三界の  
火宅を逃れて淨土を欣求する祖母が念こそ  
尊かりしか。  
たとへ平和の國に入らんとてさすがに下界  
の命の慕はしくてや、二月の中頃思ひ出多

き故郷を訪ひかねて南國の札所札所に立ち  
寄りて一代を安穩に送りし御禮詣でをなし  
て歸りぬ。三月に入りては床臥して心恨め  
しくも微聲に念佛を誦する日多かりき。梅  
一輪一輪づつの暖き新春の長閑けき日を如  
何にさ迷ひたかりしあらん。宵々の臘月夜  
を如何に見たかりけん四月に入りても悶々  
の日多く小暗き闇は祖母が室にも立ちこめ  
たり。毎朝の神佛に祈願すると新聞の續き  
物讀むを聞くは更らねど知己近隣よりの贈  
物は愈々多きを加へ養生物は祖母より我に  
多く入りたり。祖母は己に起居に自由を失  
へり。其頃一日一日青くなる一陽院の芽が  
見たしなご言ひたり。  
あゝ思へば春なるに心の浪荒れてあまなら  
ぬ身も袖ぬらす也。千度八千度悔ひても返  
らぬ悲しきよ。我幼心は祖母が細き聲など  
耳にしも入れず朝より晝まで晝より夕まで  
野さかく山さなく遊び歩きぬ唯朝々の新聞  
を枕邊に讀むぞ仕事なりし。死する日の二  
日程前日いつも課業の新聞讀むを忘れ夙  
より川乾に急しくて家にはあらざりき。新  
聞は父に依りて讀まれたり。更に母に據り  
たれども何れもわからぬ坂に讀まして呉れ  
たのみ言ひしとぞ。當時の坊は魚を獲つ、  
さのみの言ひしとぞ。當時の坊は魚を獲つ、  
あり今の坊果して何の感がある。  
次の日は終日家にありしが耳はきこえずあ  
りの新聞は讀みたれど分らざりき。  
明治四十五年五月十二日午後一時三十分祖  
母は逝けり。玉の臺にすむ麗人も塵蓋刈る

賤の乙女もつひにはゆくべき死出の旅路に  
家族の進むる眞清水を唇にちびちびさした  
る儘静かに亡き敷に入れり。落日は又曉に  
昇るものを。再び來らざる人の懐しくて祖  
母の名を呼べば聲は虚空の彼方に漂ひ去り  
魂魄はゆらゆらと永劫の懐に入れり。  
母はつと立ちて花瓶より一枝の白躑躅を手  
打りて眞白き祖母が髪に鬪しぬ。  
早くも六年の命日に當りて。

◎ 膽力の修養

伊東近良

A 膽力とは何か  
抑々膽力と云ふものは何か讀んで字の如  
く膽の力である大山崩れかゝることも驚か  
すと云ふ大磐石の精神即ち此の精神が膽  
力である  
B 膽力の必要  
a 苟も帝國男子たる以上は一旦緩急ある  
其の時には身命を鴻毛の輕きに比し君  
主の爲めに盡さざるべからず此の緩急  
の時に際し膽力無くして豈に身命を鴻  
毛の輕きに比し思ふ存分働き君の爲國  
の爲に盡忠するを得やうか否斷じて斯  
は不可能である  
b 膽力なきものは恐怖の念強きものにし  
て目上の人とか或は又全くの他人の前  
に出づる時は何となく平素の餘裕を失  
び呼吸忙しくなり脈搏穩かならず音調  
亦多少の變化を生ずるもの也斯の如く

して豈大事を成す事を得んや  
。膽力なき者は瑣細の小問題に遭遇する  
度毎に越起逡巡右顧左眴見るに忍びざ  
る舉動をなすものもある也然るに剛膽を  
有るものは是に反して如何なる大事到來  
するも泰然自若として橋縦自在也  
d 膽力ある者は死生一髮の危機に際して  
も常平生と同じ様に心得て少しも恐れ  
悲しむ模様がなく安々穩々當々と落ち  
付き拂つて居る轉機妙用の變化自由自  
在にして其の輕妙なる事電光石火の如  
し

e 『近隣に火事が起らば先づ喫煙三服し  
て而して後に取り方附けに着手すべし』  
とは『輕舉妄動の三時間は沈着正動の  
一時間にも劣る』の所以である此の沈  
着正動は膽力なくして決して實行し得  
らるべきものにあらず  
f 膽力なるものは斯くも肝要なるものに  
して五尺の日本男子と生れたる以上は  
決して缺くべからざるものである古の  
英傑曰く一膽二徳三智如何に智ありと  
も博學ありとも此の膽力なかりせば其  
の豊富なる智を發揮活用する事を得ず  
して一生涯を寶の持腐にて終らざるべ  
からず實に不經濟の極みと云はざるを  
得ないのである

○ 膽力の修養法  
膽力は素より天賦の膽と云ふ事も無きに  
しも非ず然れ共又修養によりて或程度迄

は鍛錬によりて修得し得べき性質のもの  
である而して此の肝心なる膽力は如何な  
る法によりて修養するか素より其の方法  
手段に於ても亦多種多様であるが然しな  
がら詰る所は一に歸する  
a 眞膽の第一要素は至誠の精神也三軍の  
師は奪ふべく匹夫の心は奪ふべからず  
とは至誠の精神の力の極めて偉大なる  
を云つたものであつて至誠の精神を以  
て決然として進む者は如何なる險山を  
も乗り越へ如何なる障害をも壓倒して  
必ず向ふ所に達せざるはなし曰く維新  
の英傑隆盛『誠心あれば信念強し信念  
強ければ膽力自ら生ず』と

b 精神は常に澄水の如く保たざるべから  
ず外界の事物に對して苟も心馳せ神飛  
ぶが如きは之尤も人の氣質をして戦々  
競々たらしむるものにして突然の怖畏  
は此の間より生ず一方に注意する事深  
ければ一方の油断も又愈々深き也務め  
て平如として精神を臍下丹田にたくべ  
し  
c 恐怖は往々智慮に過ぐる所より生ずる  
ものあれば決して智慮思案に凝つては  
ならない其の機に當り變に應じて此の  
心を失はずんば必ず靈妙なる當意即妙  
の策略智計を生ずべし宜しく常の時と  
非常の時と其の心を一にすべし  
d 見る所狭少なる時は其の眼光見識狭小  
にして膽量亦自ら狭小也然らば大いに

以上掲けたる a b c d e は何れも皆内的  
修養法にして是等と共に又極要なるは外  
的修養即ち柔道剣道等に依りて修養する  
事にして前者後相待つにあらざれば決し  
て完全なる修養法と言ふを得ず然らば膽  
力を修養せんとするものは前者と共に後  
者の何れをか撰ばざるべからず扱て此の  
後者の内の一たる剣道に付て世人の内に  
は往々誤解の念を有してゐる様なものが  
ある即ち肺結核の候補者とか神經質のど  
ク、連青瓢箪と幽霊との區別を知らな  
い臆病者天井裏で鼠がゴツトリ忽ち面色  
は蒼然とある者以上の如き死人同様の青  
瓢箪連の劍道罵倒の言を往々耳にする事



がある即ち曰く骨皮連剣道をするに頭が  
悪くなる「ナルホド」次に脳神経衰弱質  
地研究者曰く撃剣をするに頭がチーンと  
云ふ「ハハ」肺結核の候補者曰く剣道を  
すると胸が苦しくなる「ナルホド」次  
に青瓢箪曰く撃剣をするに頭が馬鹿にな  
る「ハハ」實に彼等青瓢箪連の云ふ事  
は我輩の頭には絶対に解せられない其の  
解せられない理由を述べれば  
a 彼の青瓢箪連の罵詈雑言は一体何を標準  
として論じて居るか譯が分らぬ單に頭  
が悪くなるか馬鹿になるか言ふの  
みで其の根據が漠然として居るのであ  
る

b 先づ斯の神聖なる帝國の武士道を如何  
なる人物が罵詈雑言するか云ふ事に付て  
考へて見ると多くは以上述べたるが如  
き青瓢箪連さもなくば大和魂の缺乏者  
に多い様である

c 現在病氣に罹つてゐるものは醫者の診  
察を受け剣道をして宜しいかと聞く  
必要もあらうが其の他の小々血色が悪  
いとか脳神経で頭が鬱々する胃が少し  
悪いとか云ふ位の者はビク／＼して醫  
師の診察を受ける必要もかゝ適當に擊  
剣をしてさへ居れば必ず病氣は漸次快  
癒するを見るのである  
d 人間の大切な脳は後頭部である前頭  
部をいくら撃たれたとて決して脳が悪  
くなつたり馬鹿にあつたりするもので

はない剣道と云ふものは人間の頭を馬  
鹿にするものならば維新前所謂武家時  
代は士農工商上下擧つて剣道を學んだ  
ものであつたらば維新前の人間は馬  
鹿ばかりで利口な人物は一人も無かつ  
た筈であるが斯の如き事はないのであ  
る却つて現代よりか一層純健な軀幹の  
頑丈な精神のシツカリした利口な有爲  
の人物が多かつた様に思はれるのであ  
る

e 彼の骨皮連の言ふ如く愈々此の剣道な  
るものが斯く弊害の多きものならば全  
國諸中等學校に正科とまでして設置せ  
られてある筈はない此の一事を見ても  
確かに無害有利なるものであると云ふ  
事は明かである

f 我輩は斯の如きわからずやのビク／＼連  
を相手にして敢て議論をするのでは無い  
けれども此の肺結核候補者の言を信頼し  
て地獄の血の池に或は針山に行く事を急  
ぐ馬鹿とも何ともやじり様のかい蛆みた  
く馬鹿が世の中には澤山ある斯の如き蛆  
の多少は實に國家の盛衰に影響する然れ  
ば此處に一言述べた譯である然らば國家を  
愛し身を愛し地獄の血の池に早く行く事  
を好まず大いに膽力を修養しよう云ふ  
ものは斯の如き誤解をしない様に留意す  
べきである

D 剣道の無害有利  
剣道なるものは彼のビク／＼連の如

き弊害の無い事は前條に於て既に陳述し  
たれば今更に改めて述ぶる必要は無いが  
念の爲今此處に再筆して見れば撃剣ある  
ものは激烈なる腦病患者或は激しき脚氣  
病者や其の他激烈なる病に冒されつゝあ  
るものは少し見合す必要もあらうが其の  
他の者は決して有害なるものには非ず却  
て筋肉の運動となり又柔道の如く肥大す  
るのみならず身長も伸ぶものにして其の  
他に輕少なる腦神経衰弱等は一二週間の  
内に全治する其の他の疾病と雖も容易に  
快癒するのである而しなから此の剣道な  
るものは唯に此の病氣を治すのみが主意  
ではない然らば何が主意か改めて云ふ迄  
もなく前條に於て述べたるが如く精神の  
修養即ち眞膽の修養である古武士の剣道  
鍛錬に殆ど寢食を忘れたのも當に技術を  
上達せしめ様としたのではなく精神の修  
養を重んじた所以である此の一事より推  
しても此の剣道なるものは精神修養に缺  
くべからざるものであると云ふ事は明か  
である

E 眞膽者の心

眞膽者の心の底を叩いて見ると重き事千  
鈞の弩の如く利害毀譽悲喜苦樂の八風吹  
けども荒れども動かさざること須彌山の如  
く又は天邊の月に譬ふべく下界に吹き荒  
ぶ風を知らず顔にて皎皎と照り輝いてゐ  
る斯くの如き意味があつて強弱剛柔轉身  
自在の活作略を以て世の荒浪も何のそ

と悠々たる態度を以て渡り得るのである

◎ 蛻菴狐の話 附 狐憑の事

竹 軒 生

其昔木曾は福島の古刹、興禪寺に桂岳禪師  
といへる高僧の在しけるが其召使ひたる雜  
僧は狐にてありきと云へる話は屢々土人よ  
り聞く所あるが右は山崎美成著提燈紀談と  
いふ書に見たり固より荒唐無稽の巷談に  
して信するに足らずと雖も童話としては中  
々捨てがたきものあり話の筋はこゝらの人  
の大方知れる事ながら提燈紀談に記せる所  
を左に掲ぐべし

『蛻菴といふもの其初め飛騨國參議秀綱に  
事へたり、秀綱滅亡してより信濃國諏訪に  
來りて簗仕を求む、其頃千野兵庫といふは  
諏訪の一族かり蛻菴を招き家に居らしむ、  
これ天正十三年の事あり、其頃兵庫身まか  
りて後、其嫡子家を嗣ぎ職を襲ひて名も兵  
庫と稱す、彼の蛻菴頗異たる性質にて勤仕  
怠らざれば、家内こぞりて頼もしくぞ思ひ  
ける、蛻菴ある時假寝しけるを人ありて何  
となくひそかに伺ひけるに老狐にてありし  
かば、その人打驚きつゝ、やかて兵庫に告  
げたり蛻菴之を覺り兵庫に見て去らんこ  
とを請ふに、兵庫云はく妨なし、汝忒心お  
く勤めて吾が家事を助くること誓て悦ぶ所  
なり何ぞ人と人にあらざるこの差別あらん  
やとて其まゝに打過ぎぬ、然れども蛻菴は  
遂にそこを立去りて岐嶺に來り興禪寺とい

ふ精舎に詣り桂岳師といふ和尚に身を寄せ  
たり師之に僧衣を與へ一室をかまへて據ら  
しめ副主の役をつとめしむ、此に居ること  
年數多經にければ師も彼の立ふるまひにつ  
けてやう／＼その人にあらざるを知りて愈  
々ねんごろにあつかひけり、扱、師所用あ  
りて蛻菴をして飛騨の國なる安國寺へ使に  
つかはしけるがその道すがら日和田村とい  
ふ地を経て田舎に宿りけり、其舎のあるじ  
か持てる不思議の鳥銃ありそは名人國友の  
造る所にして、これをためて望み見れば妖  
魔その形をあらはすといへり其夜蛻菴は圍  
爐裏のほとりに何心なく坐して居けるを主  
人がの筒をためて望み見けるに老狐の僧衣  
を着たるにぞありければ一發に之を斃すに  
果して狐にぞありけるあり、此蛻菴が書寫  
する般若心經その地に傳へて今に在りそれ  
を摸刻したるを予に贈る人あり其筆勢の古  
雅ある實に千年外の寫經に異る事ありし』

狐の文字を書せし話は諸書に散見する處な  
るか固より好事者の作り事也、興禪寺にあ  
る般若心經は字体謹嚴、敬虔の念溢るゝも  
のあり是れ奈良若しくは平安時代寫經の字  
体に相違なし

因に木曾地方にては狐憑といふ事あり所謂  
狐を持ちたる家ありて其の家の人より怨ま  
るゝ事あざれば宛然狂氣の如くありて病  
むと一方ならず中には全く狐の如き舉動を  
演ずるものありとか、されば狐持の家とは  
婚嫁を慎しむ、嫁入婿取には狐持の家たら

ざる事といふ一條は主要條件とあり居れり  
武州、尾先狐といふも全く木曾の狐に似た  
り又出雲にも此事ありといふ、其初、狐持  
の家が出来し所因は一寸考へかたけれど之  
に觸れて病氣を惹起す所は體かに心理的か  
り故に狐憑を落すには白刃を抜きて大に威  
嚇するか又は先達、行者の一喝等によりて  
夢の醒めたる如く恢復するを常とす、要す  
るに狐憑の如きは一種の精神病者に外あら  
ず狐持の家と稱せらるゝも世人の迷信に出  
で此迷信を土臺として狐憑なる一種の精神  
病者を作り出すなり、之は狐憑に限りし事  
にあらず土佐の犬神といひ何の祟り何の障  
などいふ皆心より作り出す事也、之を妖魔  
といはざるべし、さばれ心頭を洗却し來  
れば畢竟世上妖魔なきを知らん

◎ 日記の中より

大坪 時 治

我が室と我が感想

我が室は壁一重にして土藏に隣り東は小路  
小水を隔て、鐵道に隣接し西は十餘間にて  
母屋に連る東と南とは總窓の眺望絶佳神谷  
峠を見越す好處なり  
是れ冬期休暇三十日間を假泊すべき我が寓  
居にして、今述べんとする處は此邊の大觀な  
り先づ眼を内に注げば北二間は竹の書趣に  
意匠を凝せる唐紙に他の一間は二分して床  
と袋棚とに分たれやさしき間取り心ゆくば  
かりなり



床に懸けられたる軸物は丁丑の春尾州の書家丹羽勘と云へる人の細字にして筆せしは赤壁の賦あり  
一痕の寒月凄然たる光を放ち中天に懸り斜に我が書窓を照し沈々と夜はふけゆく時窓下より名も知らぬ夜鳥の啼をさくが如き一聲坐に心の琴線に觸れ異郷の思ひ胸に満つ此の夜半此の賦を讀誦すれば飄々として心此處に在らず「白露橫江光接天」の章に入れば身將に大江の畔に立ちし明月を仰ぐの思ひあらしむ且つ又袋棚下の墨繪及び竹模様をちりばめし猫足の台等は一見して當家主人の趣味に生きつゝある俳的老翁なる事を想はしむ  
南と北とは中腰の硝子障子にして壁柱皆一様に竹を以て包まれ天井のサンも竹あり地方の人此の室を諱名して竹の間と呼ぶとかや  
此の建築たるや此家の主人玄碩老が全盛時代の營作にして風流主人數寄を凝せる逸物なり庵の名を陽竹園と云ふ  
庵主先年其の嫡子を福嶋に失ひ孤影蕭然たるの觀あき非ざるも元氣鏗鏘として尙衰へず榮枯盛衰は世のからはし財寶散り失せしを何ぞ嘆くに足らんや七顛八起之れ世の原則七寶又卑人の寶のみまして此の地に名望厚く慈善の家を以て代々醫を繼ぐ翁の家系其の餘慶や必ず盡さざるべし  
鳥部野の夕煙消ゆるいとまかく人爲の建設よく幾時ぞ宇宙曠漠幾万年の古きに較ぶれば

ば人生一代の盛衰又石火電光の早きに比せん見よ阿房の大閣高樓も楚人の一炬函谷に擧るや忽ち鳥有の焦土とあるまじく區々たる民家の興亡何ぞ不則なるを嘆くに足らんや  
さるにても變らざるものは山川草木の姿なるか南窓數町下を流るゝ  
木會川へ流れこみたり天の川(一茶)  
木會川は古き昔を其の儘に碧深藍に染みて西へ西へと流るれど其の流れは永遠にあらためず鳥井峠の山容は舊によりて雲表に聳む四週の連山は或は遠く或は逼り四百に充たぬ敷原の部落を包擁せり  
抑も敷原の地は往時美濃の國惠奈郡繪上の郷に屬し和銅六年夏七月美濃守笠朝臣麻呂に勅して吉蘇路を通せしめられ後、陽成天皇の天慶三年藤原正範をして縣坂を濃信の堺とさせ給ふ其の後延長二年里人少彦名命を此の地に祀り鳥居を建立す之によりて縣坂を通稱鳥居峠と呼ぶに至れり中世にいたり信濃の國に編入せらる  
天文四年乙卯三月彼の武田晴信は木會義康と此の地に戦ひ遂に義康を走らせ自ら此の地に砦を築く其の後晴信、義康和議成り兵戈を納め義康馬を桃源の野に飼ひたるも暫し越えて天正十年武田勝頼と木會義康の子義昌とは彼の鳥居峠の山頂に嵐を起し干戈を交ふるに到りしが天險を恃む義昌の軍にはもろくも甲州勢の敗北とあり典厩今福の兩將此の地に討死す

星霜移り物變り世の變遷は走馬燈の如く時代は廻り時は去り徳川の盛世とあるや此の地も木會十一宿の時鳥(甲山)  
雨古き十一宿の時鳥(甲山)  
當時は木會峡谷中は稍々般賑の町と歌はれしが鐵道開通するに及び古の隆盛ある驛忽ち秋風落葉の哀をさめぬ  
されど古より開けたる中仙道の要驛ある故にや五百の孤村とは云へ巡遊すべき地多く此鳥居峠は上述の如き古戰場にして木會奈良井の分れ嶺たり其の頂上には御岳神社の外宮、木會義仲の古蹟矢立水及び明治天皇御野立の跡等あり極樂寺淨満寺は町の東側にありて木會谷有敷の古刹たり  
尙數ふれば木會川の運材敷原靈泉神谷の朝雲小木會の夕照等にして敷原神社の神苑は瀟灑清楚檜の木立森々と繁り幽邃極まりあり境内に芭蕉の句あり  
杜かげてわらはもきくやほととぎす  
極樂寺の暮鐘は木會川の波に響きて人の心を無情寂滅の郷に誘ふに似たり回顧すれば蟬に似たるは人の生命なるかを彼の紅顔も夕べ北郎の煙と迷ひ、もとの雪と消ゆるはかなき世のあらばし我其の哀の行末を感じては夕べを告る鐘の音の餘韻爛々たるにも一掬の涙なきを得んや噫々我が吟嘆此の木會路に入りてより層々と積り團々と凝り尾花が末に風をよぐ天地些末の印象にも深きかかしみと淋しみを感せしむるありまして冷たる風天地にそよぎて斗牛兩星一段

のきらめきを添へ端山に残る鎌月の威凄く猿江邊の樹に啼く眞夜中、獨り思を故山に馳せて惆悵に堪へざるもの、幾度ぞ思へばあさましの我が身あるかを懐かしき人に別れ親しき父母に離れ心にもなき旅路に彷徨の雁一羽憂を語る友もなく夜毎くを千々に碎くる思ひ寝に叢々起る万緒の情は胸の血潮を湧き返して藥研に肝肉を碎くの思ひあり。(完)

和歌

木會を偲びて

在美術 悠 久 生

駒ヶ嶽紫黒うくれ行きて峽にさびしく汽笛はひびく  
夕日さし御嶽の雪あかしくと輝りてくれゆく木會の春かも  
かざろひの山あみの上に立つ見えて川の瀬きこゆ寄宿舎の朝  
夕げふる細き峽道一人行けば野に飼ふ馬のつき来るさびし  
鎌つきて腰打のばし峽見やる田の面の水に馬の影揺る

春季雜詠

横井正風

青柳の糸くりかへす春風に  
落の葉をよぐ春の日の午後  
鳥の音に斧振る音のつれ合ふ  
朝霧深き木會の木山よ

名物の草餅賣りし峠茶屋

今はあどなく春雨の降る山の端に月は残りて曉方の野面を輕う春風の吹く御嶽の山に朝日は照りそめて木會の流れに朝霧は立つ渡守まだたきいでぬ朝川を浮いて流るゝ水鳥のむれ湯の宿へ通ふ三里の野の道を陽炎燃わて春風の吹くほろ／＼と山鳩啼ける夕暮を鐘の音響く山峽の村

俳句

大坪蘇仙

親舟の遠き火影や冬の海冬近に築の小魚を賣る小村蓮の實の飛ぶや山田の朝焚火暮れ淋しいざ打ち出でん此の砦白鹿や奥千本の紅葉宮白雲の異域や五箇は芋の郷蹴上月嵯峨の還幸の白拍子白菊に花客あり鳥鷺の勝目あるしむじみと聞くや時雨の遠砧日向より日向に飛ぶや冬の蠅紅白の測量旗や秋晴るゝ古關破れて廢道近き冬田かな秋雨や長屋の灯のゆるぎ秋雨や二豎また窓ぬ枕元鳥原の灯の小ゆるぎや秋の雨

笹鳴や町に二里の小笹原

龍華寺の法會の朝や笹鳴す笹鳴や奥の細道下る朝大根引く畑や焚火の散し藁古城趾の草まで寒し枯尾花哀知る人に申さん時雨の句青丹よし奈良は月夜の都かか櫓焚くや雪の難所の小制札足場下櫓の焚火や割石工櫓勝火大工値上を語る哉風呂吹きや仙台様の嗜好物風呂吹に寺の住持を招きけり何の議にまかり給ふや神の旅たくれますびつこの神やはすらむ駒勇む今朝の御立ちや神の留守山ひびく今朝の太鼓や神送り鑿かはす槌の隙間に霞かお立ち消ねの行燈つめたし玉霞はねかへす砥師の桶に霞かお馬立場馬子の揃の年忘れ灯のゆるぎ大津女郎衆の年忘れ身たしなみ刀自の化粧も三ヶ日殿に藩庫の門や松飾花婿のぬれて御座すや水祝年賀していとまいはせず水祝何騒ぐ厨小暗し嫁が君厨には唯下女ばかり猫の戀主は誰ぞ夜のゴム輪に花吹雪窓近にうかむ小山や春の雨橋吹雪毎夜此の過何事ぞ



湯あがりの小袖に吹くや春の風  
春風や奈良大佛の大胡坐  
大舟に小舟群るゝや濱の春  
徐につきし小驛や春の風  
海原の真只中や春の風  
韓馬遅々渡る川原に春風す  
葉櫻や斜陽に映ゆる木祖の谷  
霧はれて檜さはらの美林かあ  
木の芽のびくの木曾路晴るかあ

◎學校便り

○實習終了 四月初より開始されたる春季實習は五月五日を以て無事終了せるが實行せる事業の大略左の如し  
一、苗圃の播種及床替 約二千坪  
一、造林地の新植及補植 約四町歩  
一、農作物の仕付 約八百坪  
一、植物園及庭木の手入れ 約五百坪  
一、栽植地の手入れ 若干  
○七宮校長出縣 本縣中等學校校長會議の爲五月七、八の兩日出縣せられたり  
○稻葉内務部長來校 稻葉内務部長は五月十四日本郡視察の序を以て本校に來臨、校舎、標本室等を巡視され生徒の爲め講堂に於て一場の希望演説を試みられ終て直ちに退出せられたり隨行員は長田農商課長を始めとし窪田福嶋警察署長等あり  
○開校記念式 五月十五日は本校創立開校記念日あるを以て午前九時より講堂に於て

紀念式を舉行し校長の訓話ありて閉式せるが校長の訓話中にも見わし如く此記念日の頃は例年修學旅行の時季に際せるを以て在校生は僅に第一學年生のみにて全校擧て此日を祝賀することもあかりしが本年は旅行も延期せしを以て一同講堂に集まりて當時を思ひ創立に與つて力ありし人々の功勞を回想し吾人の責任を思ひては一層の奮勉を心に誓ひて已まざりき  
○修學旅行 本年は五月十五日を以て出發の豫定ありしも鐵道院の都合により二十二日出發の事に變更せり例によりて三年は關西方面、指導教員は西澤、宮川兩教諭、二年は關東地方、指導教員は北村、福山兩教諭にして三年は六月四日、二年は六月一日夫々歸校の豫定あり  
○架橋落成 本校より裏山演習林に至る道は黒川の深谷を隔てたれば是迄大迂回をなして發電所又は奥の橋によりて通行せしか年來不便を感ずる事多大ありしを以て本年四月七十六圓を投じて本校西下より對岸に架橋する事あり五月三日落成せり、尙此橋より裏山に至る三百間の山路も全時に竣工を告げたり

◎校友會便り

大正六年度校友會豫算會  
記事  
○部長會 本年度豫算につきて五月拾七日

午後より校友會各部長參集して各顧問先生とともに本年度事業並に之が經費に關して研究討議をなしその大綱を決定せりそれよりかねて問題たりし柔道部設置論に入りそれが利害につきしばし討議の末結局四拾六圓六拾錢を本年は創設の故をもつて基金より出すことあり満場一致をもつて可決せり  
○總會 五月拾九日午前拾一時より講堂に於て本會總會を開催しかねて部長會に於て決定せし本年度豫算を提出し議定せんとせりこれより先七宮會長は議長席につき豫算編成の經過報告ありそれより二三の質問答辯ありて無事原案通り可決せり次に會長はかねて部長會に於て決議せし柔道部設置につき會員の意見をたゞかれしも久しき以前より熱望せしことゝて之又拍手喝采滿場一致をもつて可決せり收入、支出左の如し  
○總收入  
金四百參拾六圓九拾八錢三厘  
○總支出  
金四百參拾六圓九拾八錢二厘  
○內譯  
金參百六拾七圓貳拾錢 在校友會員費  
金六拾五圓 卒業生よりの雜誌代  
金參圓貳拾七錢二厘 先年度繰越  
金壹圓五拾壹錢 運動會殘金  
○總支  
金四百參拾六圓九拾八錢二厘  
○內譯  
金五拾五圓九拾參錢二厘 庶務部  
金百五拾貳圓七拾五錢 雜誌部

金八拾圓 辯論部  
金參拾圓 擊劍部  
金貳拾七圓 庭球部  
金貳拾八圓 弓術部  
金六拾參圓參拾錢 遠足部  
外 柔道部創設費  
金四拾六圓六拾錢 柔道部創設費  
右ハ校友會基金ヨリ支出ス

◎辯論會の記

東風駘蕩春陽暉々として花笑ひ鳥歌ひ春光正に融々たる四月二十七日我が校友會は新入生諸君の歡迎會を催しぬ  
張り繞らされたる紅白の幔幕は花の香誘ふ春風に緩く和氣を含みて流れ中央に一段高く構へたる演壇は天晴れ辯士の登壇を待ち顔あり  
劈頭第一に矢崎清海君登壇して開會を宣するや續いて今日の花形辯士は右より左より絡繹として壇上に立ち各々獨特の技倆を發揮して或は懸河の辯を振ひ或は滑稽突梯人をして拘腹せしめ多大の感興を催さしめたるが殊に新入生諸君の活動振りは多大の囑望と興味とを以つて迎へられぬ  
左に當日辯士の芳名を紹介せん  
開會の辭 矢崎 清海君(二年)  
歡迎會に對して御禮の辭 高橋 秀惣君(一年)  
名譽と金錢 星加 晴雄君(二年)  
徹底と研究 米倉 巧君(一年)

時 間 村上 道信君(二年)  
天才の裏面 伊原 邦雄君(二年)  
我が青年の南洋發展 千田 瑞穂君(二年)  
伊東 近良君(二年)  
膽力養成 唐澤 繁夫君(二年)  
精神一到何事か成らざらん 木戸 金市君(一年)  
偶 和田常次郎君(二年)  
感激の人 小縣 球治君(一年)  
青年の任務 今井 徹郎君(二年)  
雜 感 七宮校長先生  
膽力を養へ 小林 右内君(二年)  
閉會の辭 終りに一言を附して新入生諸君に望む我が校友會の爲め幸にして自重あらん事を  
春風遠く清香を掠めて頻りに花信を齎し小丸の山上に張れる觀櫻の宴も愈切迫しぬされば各辯士が絞れる興味も袋も十一時半惜しき名残を止めて會は閉されぬ  
(有外生記す)

◎觀櫻會の記

蘇峽の天地今や春風駘蕩として彼の冬の神もさすかの鋭鋒を納めて退いてしまつた櫻は淡く海棠は艶に李の妍さは柳の緑にこき交せて麗しい況して蘇水の春光に閃々たるを眺めては誰か踏青の心の油然たるを覺わかいものかあらうか須らく山野に杖を曳いて浩然の氣を養ふべきではあいか

此チャンスを逸すまいと我校友會遠足部は時宛も卯月廿七日午後から小丸山上に於て愉快に而して盛んな觀櫻會を行つた  
本日は瀧澤遠足部長缺席の爲下嶋副部長開會の辭を述べ各自に前に供へられた壽司、果物其他は我等健啖を充分に満足せしめた例に依つて各年級實習組かられ選手餘興に入つた最も興を引くべく期待した新入生諸子が餘りに大人振つて之と云ふべきものはあかつたが然し吉田、立道、遠山等其他諸君に對して何處迄も拍手を惜まらかつたとして非常に何れも歡迎せられた殊に三年級島田君は詩吟玲瓏として君か美しい情緒れ一句一句我胸中れ或物と合致し小鳥も爲に囀を止め小蝶も爲に翅を休むるかと思せられた更に飯島先生が趣味に就ての題下に駒嶽の殘雪を背景に春風麗らかなの中芳草を踏んで面白く詢々と言かれ或は滑稽に或は眞面目に先生獨特の辯は小丸山上二百の健兒を抱擁して陶然たらしめた暇下さる處福嶋町の一帶を点綴せる櫻々を点綴せる新緑相反映して實に又と得難い眺望であつた午後三時我等健兒が肺腑を迷る校歌及び萬歳の聲の崩るゝと共に此處に惜しくも散會を告げた  
早朝から風さへ加へて雨を催さんとした當日は我輩實勤勉活氣横溢せんとする杭ヶ原二百の健兒の意氣を愛したのか感じたのか恐れたのか午後からは僅か駒嶽山上一朶



の彩雲を見る許り實に春光盈々たるものであつた思ふに我校友會に於ける本日の觀櫻會は天神擁護の下に此の如く盛大に行はれたのであらう

◎會員異動

- 多田慶次郎君 山梨縣管理課甲府出張所に轉任
- 島田雄太郎君 秋田縣山本郡太良嶺山古河家林業部に入る
- 高樋博君 本縣公有林野整理林區駐在技術員として上伊那郡役所に駐在を命ぜらる
- 倉科浦一郎君 全上技術員として東筑摩郡役所に駐在を命ぜらる
- 若林遊龜尾君 全上技術員として小縣郡役所駐在を命ぜらる
- 篠原昇士君 全上技術員として北安曇郡役所駐在を命ぜらる
- 柏澤國治君 全上技術員として南佐久郡役所駐在を命ぜらる
- 原喜四三君 下伊那郡林業技手に轉任せらる
- 服部啓次郎君 東筑摩郡林業技手として赴任せらる
- 渡邊知則君 石川縣廳勸業課林務係として赴任せらる
- 木下稗藏君 甲府管理課を辭して若尾家に就職せらるゝ事とかれり
- 兒野榮君 山形縣廳に轉任せらる
- 南村末吉君 愛媛縣新居郡中萩村住友別

子鑛業所山林課大永派出所に轉任せらる  
○塚田大君 茨城縣日立鑛山に入所せられたり

○町村林業技術員 本縣町村林業技術員として赴任せる諸君左の如し

- 征矢野克己君 小縣郡青木村外三ヶ村
- 平田稻雄君 同寶賀村
- 水橋要作君 同武石村
- 中村五郎君 下諏訪町
- 等々力官一君 上伊那郡南箕輪村
- 平田久良治君 下伊那郡神稻村
- 岡田垣治君 上高井郡高井村外六ヶ町村
- 東原智君 北安曇郡林業技手に轉任せらる
- 千田政美君 高崎小林區署に轉任せらる
- 吉澤英雄君 福嶋縣石城郡平小林區署に轉任せらる
- 柳澤義雄君 福嶋縣福嶋市小林區署に轉任せらる

◎會員の訃

會員遠山一郎君は豫て二豎の冒す所とあり湘南に臥遊せられつゝありしが四月廿四日病革まり溘然易質せられたる由實父兼藏氏より報知あり本會は會長の名を以て弔詞に添へて金壹圓を贈り弔意を表せり  
右に對し遺族より會長宛左の禮狀を寄せられたり  
謹啓故遠山一郎死去に付懇篤なる御吊詞並に過分なる香料に預り誠に忝候早速

參上御禮可申上處取込中につき乍略儀以  
端書御禮申上候  
五月十日 遠山遺族一同

◎大正五年度校友會經常費

決算報告

◎收入之部

金四百拾參圓九拾參錢

内 譯

金壹圓九拾參錢

金六拾四圓六拾錢

金參百四拾七圓四拾錢

◎支出之部

金四百拾參圓九拾參錢

内 譯

金六拾五圓貳拾七錢五厘

金八拾壹圓六拾錢

金百四拾四圓七拾五錢

金貳拾四圓九拾貳錢

金貳拾貳圓四拾五錢五厘

金四拾圓四拾九錢八厘

金貳拾壹圓拾六錢

金拾 圓

金參圓貳拾七錢二厘

右之通り相違無之候也

會計顧問 福山也

- 庶務部
- 辯論部
- 雜誌部
- 擊劍部
- 弓術部
- 遠足部
- 庭球部
- 運動會費
- 翌年度繰越

